

## 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2932 号	氏名	阪上 暁子
審 査 担 当 者	主 査	石 竹 達 也	(印)
	副主査	持 小 圭	(印)
	副主査	に 野 高 史	(印)
<p>主論文題目：</p> <p><b>Association between physical activity, occupational sitting time and mortality in a general population: An 18-year prospective survey in Tanushimaru, Japan.</b></p> <p>(一般住民における身体活動、就業中の座位時間と総死亡との関連：日本の田主丸における 18 年間の調査より)</p>			

### 審査結果の要旨（意見）

一般住民集団を対象とした歴史ある田主丸コホート研究の一環であり、身体活動と総死亡との関連を明らかにするために 1999 年に実施した健康診断時のベースラインデータにおいて身体活動の程度と就業中の座位時間に着目し、18 年間の追跡期間中の総死亡との関連を検討した論文である。コックス比例ハザードモデルでの解析では、性・年齢による調整後、活発な身体活動は総死亡を有意に減少させること、また就業中の座位時間が長いことが、総死亡リスクを有意に増加させることを示した。地域住民や関連組織との信頼関係に基づき、死因情報の収集が大変困難な状況下においても地道にデータを収集して今後の住民の望ましい保健行動につながる有用なエビデンスを提供しており、学位の授与に値するものと評価する。

### 論文要旨

身体活動の低下が心血管イベントや癌を含む総死亡と関係していることは良く知られており、近年『座り過ぎ』がもたらす健康障害への認識が高まっている。今回一般住民における身体活動のレベルと総死亡との関連、身体活動量と動脈硬化のパラメーターとの関連、就業中の座位時間と総死亡の関連について調査した。

1999 年の田主丸健診受診者のうち、1,680 名（男性 693 名、女性 987 名）を対象に 18 年の追跡期間で解析を行った。身体活動および就業中の座位時間は、Baecke の質問票を用いて評価した。身体活動を『仕事』『スポーツ』『余暇』の 3 つの指標に分けて評価し、それらを足したものをトータルの身体活動とした。死因は死亡記事、治療歴、死亡診断書、カルテを参考に調べ、かかりつけ医や家族、その他目撃者への聴取により決定した。統計学的手法は SAS を用い、コックスの比例ハザードモデルを用いて解析した。

18 年間追跡し、合計 397 名が亡くなった。年齢と性で補正後、身体活動量と総死亡は有意な負の関連を示し、身体活動レベルが高い人は低い人と比べ、死亡リスクは 0.85 倍 (95%CI:0.78-0.92) であった。就業中の座位時間と総死亡は有意な正の相関を示し、就業中の座位時間が長い人は短い人と比べ、死亡リスクは 1.16 倍 (95%CI : 1.05-1.27) であった。